

私を堕とせるのはただ一人？いや、こ

からが恋人だし！

【第9話】

みなぎし　すい

【人物一覧表】

柊千咲：女子高生

白石彩夏：社長令嬢

神谷里見：女子高生

杉園愛梨：モデル

飯田早苗：女優

柏木奈子：千咲の叔母

前田香：白石インテリジエンス社員

体育教師（38）：体育教師

白石インテリジエンス社員たち

○女子高・3の3教室（朝）

柊千咲と神谷里見、千咲の席で楽しそうに絵を描いている。

里見「絵うまいじやねえか！」

千咲「ジヨジヨは描きなれてるもんねー！でも別にそれだけ」

千咲M「楽しい。だけじやない。なんか、それとは違うふわふわとしてあつたかい気持ちを感じる」

千咲、里見をじっと見つめる。

白石彩夏、千咲の背後に近寄り、
彩夏「えいっ」

千咲の胸を揉む。

千咲「あんっ！ い、イッイク、イク」

千咲、頬を赤らめて喘ぐ。

里見「おい！ 何やつてんだよおおえ！」

飯田早苗「学校で破廉恥行為はやめなさい！」

杉園愛梨「千咲ちゃん、おはよう」

早苗と愛梨、教室に入ってくる。

千咲M「いつもの友達だあ」

千咲、ほわほわした表情になる。

彩夏「もみもみ」

千咲「も、もう！ いつもどおりあいさつがわりに胸を揉むな！ あいさつはあいさつでしろ！」

里見「そうだぞ！ 千咲が困るだろ！」

千咲「里見ちゃん。おっぱい揉んでみたいなら、ちょっとならないよ」

里見、恥ずかしそうに視線を逸らす。

里見「ち、千咲。実は、あたしこの通り貧乳だから、憧れてて」

千咲、胸を少し突き出す。

里見、千咲の胸を揉む。

千咲「あんっ！」

彩夏「わあお、里見ちゃん大胆」

千咲「それ彩夏いつもやつてるよね？」

彩夏
いつも揉んでるよね」「あんっ！」

里見「お、おつきいな」

千咲「あ、うつ」

千咲、頬を赤らめる。

里見、千咲の胸の突起を触る。

千咲「あ、イク、イク、イク、イクんっ」

里見M「すげえ、千咲エロい」

千咲「んっ！」

千咲、自分の口を両手で押さえ、

千咲「イクつ！ イつく！」

ビクンと震える。

早苗「あなた、安易に受け入れるのやめなさいよ……」

早苗、ため息をつく。

千咲「いやいや友達だから！ 友達じやなかつたら怒るよ！」

早苗「やれやれ、とんだ悪魔ね」

千咲「違う！ わたしはむつりじやないから～つ！」

早苗「ええ。オープنسケベだからね」

千咲「それも違うつ！」

○柏木宅・居間（夕方）

柏木奈子、料理を作っている。

千咲「スケベじやない……友達が胸揉みたい
つて言つてるだけだもん……女子同士で揉
むのは普通だもん……ちょっと敏感なだけ
だもん」

千咲、ぬいぐるみに顔をうずめている。
インターホンが鳴る。

○ 同・玄関（夕方）

千咲、玄関扉を開ける。

里見、千咲の目の前に立っている。

里見「おう！遊びに来たぜ！」

千咲「うん！上がつて」

○ 同・居間（夕方）

里見「お邪魔します。もしよければ、お泊
まりしてもいいですか？」

里見M「千咲によれば柏木さんは優しいはず
だから」

奈子「いいわ。ちょっと多めに作るから時間
かかるけど、待つてね」

里見 「はい！」

○ 同・寝室（夕方）

里見と千咲、ベッドに座る。

里見 「和室のくせしてベッドあんだな」

千咲 「うん、なんかあつた」

里見 「な、なあ。友達なら、キスってすんのか？」

千咲 「わたしはあや」

千咲 M 「あっぶな！ これは言っちゃダメ」

千咲 「し、しても、いい、よ？ おっぱいとキス、なら」

千咲、頬を赤らめる。

里見 「ほ、本当か」

千咲 「だつて、まだわたしとしては友達の彩夏に、揉まれるのいいつて言つちやつてるから」

里見 「お、おう。お前が早苗から悪魔つて言われた理由がわかつた気がすんぜ……」

千咲、上半身の服とブラを脱ぐ。

里見 「なな、なんで丸出しなんだよ！」

千咲 「女子は友達だったら一緒に風呂とか入る、から？」 それに、1回彩夏にむりやりされて、里見ちゃんもわたしのこと好きなのにそっちだけ断つたら、なんかかわいそうだし」

里見 「そ、そっか」

里見M 「こいつめちゃくちやバグってんじやねえかあおえ！ 下しないところでしてんだろうこれ！ こんなバグったの、ぜんぶ彩夏のせいだな」 柏木さんにレズつて思われてるかもしだねえのスルーしてるしょおえ！ 誠実なのか悪魔なのかわかったもんじやねえ！」

千咲 、ベッドに寝転がる。

千咲 「下以外、ね」

里見 「おう」

里見 、千咲におおいかぶさり、口づけをする。

千咲 「んつ……んつ……」

里見、ゆっくりと唇を離す。千咲の胸に優しく触れ、揉む。

千咲「あ、イク、イク、イクッ」

里見「おまえ敏感すぎんだろ」

千咲「と、友達が望んでるなら、これくらい、体張れるからっ」

里見「そ、そうなのか」

里見、千咲の乳首を触る。

千咲「イク！ イクッ！ 気持ちいっ！」

ク、あんつ、あんんつ、んんつ

里見「な、なあ。吸う、のは？」

千咲「いい、よ……」

里見「まじかよ」

里見、千咲の乳首を口で咥える。

千咲「ひあああんつ！ イク！ イツちやうつ！ だめえつ！ イク！ スキ！」

ちやくちやにされるのスキつ！」

里見、千咲から離れて上半身の服を脱

ぐ。

千咲「えつ……？」

里見 「し、下は触らねえから」

千咲 「ちよちよつ！ なな、それは」

千咲、顔を真っ赤にする。

千咲 「そ、そんなにわたしがスキなら」
里見 M 「そりや千咲でも、恥ずかしいか」

里見、千咲に覆いかぶさり、体を揺ら
して互いの胸をこすり合わせる。

里見 「お、千咲と、こんな。恥ずかしいけど、
あつ」

千咲 「あ、そんな、乳首がつ。こ、こんなのが
イクつ、無理、耐えらんないつ！」

里見 「い、イキそうなのか」

千咲 「う、うんつ、すつごい、イキそう。里
見ちゃん、気持ちいい」

里見 「あ、千咲が好きで、やめらんねえ」

千咲 「い、いいよ。友達だから。わたしが満
たしてあげるからつ、もつと、もつとして

えつ」

里見 「千咲！」

里見、千咲に口づけをし、片胸を咥え、

もう片胸の乳首をつまむ。手の支えがなくなり、互いの胸が強く擦れる。

千咲 「んんんんんんんんんんんんーッ！」

千咲、ビクビクと大きく痙攣する。

互いの唇が離れる。

里見 「あ、かわいいな」

千咲 「あ、まだイクつ……んつ！ んつ！」

千咲、体をビクンと震わせる。

里見 M 「余韻でイクとか、どんだけえっちなんだよ千咲……」

里見、千咲を見る。

千咲 N 「わたしは、夢に挫折したあの時から、壊れてしまっていた。しかし今のところ、当のわたしにそれを気づく余地はなかった……」

○白石インテリジェンス・会議室（夕方）
彩夏と前田香、彩夏のテストを見てい
る。

香 「よくできました」

彩夏 「これからも1位や満点を取らなきやだめのかしら？」

香 「いえ、正確にはそのような必要はございません。あくまでみんなの助けに、みんなの規範になることが求められています」

彩夏 「そんなアバウトな。それに助けって話

なら、早苗の方がみんなに勉強教えてる」

香 「それでも白石様はじゅうぶんみんなの規範です。白石様、最近なにか変ですよ」

彩夏 「そうかしら」

香 「もしかして、——（彩夏に何か言葉を伝える）ことを気になされているのですか？」

彩夏 「……」

彩夏、拳をぎゅっと握る。

香 「大好きです、白石様。飯田様をパートナーになさいますか？ 飯田様なら、尊いものが見れてわたしとしても願つたり叶つたりですが」

彩夏 「え？ あ、いや別に早苗とは友達だから。それ今前田さんが言つたばつか」

香 「そうですか……」

香、しゅんとする。

○柏木宅・寝室（夜）

千咲、里見、奈子、ベッドに寝転がつ
ている。

奈子「里見ちゃんはいい友達なの？」

千咲「うん。だから心配しなくていいよ。自
分が悲しないような、後悔しないような
選択をするから」

奈子「それならいいわ。里見ちゃん、千咲を
よろしくね」

里見M「そう言われると結婚みたいだな……」

里見、頬を赤らめる。

千咲「ねえ。わたし、里見ちゃんのこと大好
きだから」

里見「な、ななな何言つてんだ！ よ、よ
せよ！ 恥ずかしいな！」

千咲「だつて、もし何かがあつてどつか行つ
ちやうとかあつたら怖いんだもん。だから、

一緒にいるうちに好きは好きって言いたい
なつて！」

里見「まぎらわしい！」

千咲「でも、返事はぜつたいするから。それ
まで待つてて」

里見「お、おう」

里見、恥ずかしそうに顔を手で覆う。

奈子「人の迷惑にならなくて千咲ちゃんが幸
せなら、好きなことしていいからね。千咲
ちゃんには幸せになつてほしいから」

里見「あの、柏木さん」

奈子「なに？」

里見「千咲を幸せにしま、ああ、じやなくて
！えつと⋮⋮千咲と仲良くします！」

千咲、ドキッとする。

千咲M「毒抜けた里見ちゃん、かわいい⋮⋮」

奈子「そう。仲良くしてあげてね。千咲の意
思を無視して傷つけたりは絶対やめてね」

里見「はい」

奈子「あなたいい子ね、おやすみ」

奈子、目を閉じる。

千咲「里見ちゃん。キス、しても、いいよ。
正直、嫌じやない」

千咲、寝転がりながら里見と向かい合
い、唇を近づける。

里見、口づけする。

千咲「んっ、んっ、んっ、んうっ」

里見「ふひあ（好きだ）……」

里見、互いの舌を絡ませる。

千咲M「やば、こんなすぐイク……つ！」

千咲、ビクンと震える。

○柏木宅・玄関（朝）

千咲と里見、靴を履き替える。

里見「行こうぜ」

千咲「うん！」

千咲、笑顔。

○通学路（朝）

千咲と里見、談笑しながら歩く。

○女子高・校門（朝）

千咲「おはようございます！」

体育教師（38）「おはよう！」

千咲と里見、校門を通る。

○同・3の3教室（朝）

千咲と里見、教室に入る。

彩夏、早苗、愛梨が談笑している。

千咲「おはよ！」

彩夏「おはよう千咲！」

早苗「おはよう」

愛梨「お、おはよう」

里見「おはよう」

千咲、席に座り、指で自分の唇に触れる。

彩夏「どうしたの、口押さえて気分でも悪いの？」

千咲「ふえつぶい、いや別に」

彩夏「え。じや、じやあまさか」

彩夏、顔面蒼白になる。

彩夏「うそだ、ふあああああ…」

彩夏、倒れる。

千咲「彩夏が死んだ！」

早苗「あなたのせいでしょ千咲」

千咲「ええっ！」なんで!?」

早苗「ハ、この悪魔…」

千咲「え？ 前はわたしにデレたのに厳しい…」

早苗「ばか！ あれはあなたが悩んでいたから仕方なくよ！ 今は別に元気でしょ！」

彩夏「早苗、優しいじやん」

早苗「ん？」

早苗、頬を赤らめる。

千咲N「こんな幸せが、いつまでも続けばいいと思っていた。まさか、水面下でみんな計画がうごめいているなんて、思いもしなかつた」

里見「おい愛梨、ちょっと放課後來い」

里見、愛梨を睨む。

○ 同・屋上

里見と愛梨の2人つきり。

里見「てめえ、ずっと隠してんだろ」

愛梨「わ、わたしはあの時から、真面目に生きようつてがんばってきて。隠し事なんて」

里見「そのごめんなさいつて態度向けられんのがむかつくんだよ！」

愛知「ひつ」

里見に怒鳴られ、愛梨、涙目になる。

里見「ずっとあたしのあとついてきて償い償
いってよ、いい加減にしろよ」

愛梨「でも、ずっと後悔してたから、ずっと
苦しかったから」

里見「あたしはてめえの罪滅ぼしのためにい
んじやねえよ！　ごめんごめんうつせえな

！」

愛梨「ごめ」

里見「ああくそ！」

里見、愛梨の胸ぐらを掴み、

里見 「いいかげん自分のために生きろや！」

てめえの人生だろが！　ずっと気いつかわ
れて気持ちわりいんだよ！」

投げるよう勢いよく離す。

愛梨 「か、隠してるって何を」

里見 「てめえの気持ちだよ！」

愛梨 「えつ」

愛梨、あっけにとられた表情になる。

里見 「てめえのことは許してねえ！　けどな
！　てめえがずっと遠慮してばつかであた
しだけ先行つたらよよ、こっちが寝覚めわ
りいんだよ！」

愛梨 「どういう、こと」

里見 「あたしは告つた！　てめえはどうなん

だ？」

愛梨 「あつ」

※　※　※

(フラッシュ)

愛梨と千咲の楽しい思い出。

※　※　※

愛梨 「わ、わかんない」

里見 「じやあ確かめてこい！」

愛梨 「でも」

里見 「でもじやねえ！ あたしはちゃんと好きって伝えた！ ずっと、てめえが自身なさげにしてんの見た！ それはあたしへの申し訳なさと同時に、千咲への特別な感情があるからじやねえのか？ はあ、はあ、はあ」

はあ

里見、肩で息をする。

里見 「悪かったな、人様のことにずけずけ突っ込んでよ。けど……あたしはてめえが嫌いである前に、人を助ける医者でいるつて決めてんだ。もちろん、てめえの心もだ」

愛梨 「里見ちゃん……」

里見 「言いたかったのはこんだけだ、じやあな」

里見、歩き出そうとする。

愛梨 「待つて」

里見、止まる。

里見 「なんだよ」

愛梨 「ありがとう、里見ちゃん」

里見 「ふんっ」

里見、歩き出す。

愛梨、里見の背中をじっと見つめる。

○ 杉園宅・愛梨の部屋（夜）

愛梨、机に向かって宿題している。

愛梨 「たしかに、千咲ちゃんといふと気持ち
がほわほわするし、ドキドキする。だけど、
ちゃんとわかんないまま返事するのも違う
よね」

○ 神谷宅・寝室（夜）

里見、ベッドに寝転がっている。

里見M 「千咲は心が弱いから、きっと何回も
泣いて心がボロボロになつていつてる。あ
いた穴は、あたしがふさいでやらなきやな
らねえんだ。1カ月よりもっとかかるかも
しんねえ。それまで、千咲に好きになつて

もらえるように努力するんだ。こればつか
は彩夏には負けらんねえ」

里見、表情をきゅっと引き締める。

○白石インテリジエンス・オフィス（夜）

社員たち、パソコンに向かって仕事し
ている。

社員A「聞いた？ アメリカの社長の御子息
から連絡があつたつて」

社員B「ああ、聞いたぜ」

社員C「それってつまり」

社員D「向こうももうすぐ御子息に継ぐって
ことだよね。予定している共同事業は非常
に大規模なものだから、絶対に向こうに気
に入られ……いや、気に入られたからこそ
こうして大規模プロジェクトをやることに
なったんだもんね」

社員A「うん。だから、女の教育は社長ご夫
妻や前田さんに任せておけばいいわ」

○ 柏木宅・寝室（夜）

千咲、ベッドで布団をかぶつて目を閉じている

千咲、震える。

千咲「ん、なんだろ。今何か変な感じが」

千咲N「わたしは、どこか楽観視していた。
ただ、自分の気持ちに向き合えばそれでいいと——」